

竜使いの姉(双子)と…

寿垣遥生(エブリスタでは菅原こだま)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

シリカこと綾野珪子の双子の弟である綾野珪太は姉が大好きな高校1年生。そんな彼はある出来事を切欠に姉である珪子との禁断の恋が幕を開けるのであった…

※この作品はSAOの二次創作です。一部キャラ崩壊が含まれる可能性があるので、『シリカたんはこんなんじゃねえええ!!』という方はUターンを推奨いたします…m(´`´´)m

※時間軸は劇場版と三期の間となっております。

※作者は駄文メーカーです。

それでもOKな方はゆっくりしてってね!!

追記

アンチ・ヘイトのタグが一時期ありましたが、あれは誤操作により入ったものです。皆様には誤解を与えてしまい申し訳ありませんでした…

第二弾直葉ちゃん編↓<https://syosetu.org/novel/220919/>

## 目次

綾野姉弟の日常	1
女性観	5
珪子の気持ち	9
好奇心	14
A L O 《アルヴヘイム・オンライン》の世界	19
S i l i c a	24
冒険の始まり	29
引き裂かれる姉弟（前編）	34
引き裂かれる姉弟（後編）	41
禁断の恋、固まる決意	48
綾野姉弟の答え、無限の未来へ…	55

## 綾野姉弟の日常

side 主人公

俺にはとても仲の良い双子の姉がいる。彼女は可愛くて優しくて誰よりも尽くしてくれる自慢の姉だ…今日も朝を迎え、いつものように足音が聞こえる。それを俺は寝ながら待つ…

「珪太、朝だよ…起きてー!」

ドアが開き、俺の姉が部屋に入って俺を起こしにやって来る…ちなみに、”珪太”とは俺のことだ。

「今日から学校だよ。ねえ、早く起きないと遅刻しちゃうよ?」

俺の身体をゆさゆさと揺らす姉…普通だったなら素直に起きるのが普通だが、ここはあえて反抗する。それがいつもの楽しみだ♪

「ねえ、起きてよ!何で起きないの?もしかして、昨日のことを怒ってるのかな…あたしが勝手に珪太のアイスを食べたから?」

まあ、それに関しては怒ってないんだけど…むしろ気にしてない。単に姉の反応で遊んでるだけである。

「ごめんね。代わりに私のプリンを食べていいから、だから起きてよ…」

ラッキー、プリンゲットだぜ!そのタイミングで俺はゆつくりと(わざとらしく)目を覚ます。

「プリンありがとう、こねえ。おはよう♪」

「お、おはよう…まさかとは思うけど、さっきの聞いてた?」

「うん!」

「はあ…とにかく、制服に着替たら降りてきてね?朝御飯の準備できてるから…待ってるよ。」

そして、姉は俺の部屋を後にする。こうやって俺は可愛い姉をいじるのが大好きなのだ…昔からずっと。

~~~~~

「ごちそうさま。今日もこねえの手作り朝食は最高だよ！」

「ありがとう！それじゃあ、後片付けは私がやっておくね…」

「いや、俺も手伝うよ。こねえばかり働いてたら悪いからさ…」

「うん、いつもありがとう…珪太。」

ちなみに、「こねえ」とは俺の双子の姉のことで名前は綾野珪子。

こねえは所謂SAO生還者の一人で2年間ずっと目を覚まさなかったのだが、一昨年の秋口に目を覚ましてリハビリを乗り越え、今はSAO生還者が通う学校に通っている。

「こねえ、学校はどう？」

「うん、楽しいよ。珪太はどうなの？」

「俺は普通かな、別に楽しくもつまらなくもないって感じ。むしろ寂しいんだ…」

「寂しい？」

「うん…俺とこねえってさ、幼稚園からずっと一緒だったじゃん？そんな中でSAO事件に巻き込まれてこねえは2年いなかっただよなものだったし、こつちに戻ってきてからも違う学校だからね。」

「珪太…」

「正直なことを言っただけ、こねえと一緒に慣れてたんだ。こねえと一緒にじゃない学校生活なんて考えられないよ…」

俺は今でもあの時の出来事はハッキリと覚えている。こねえがSAOにダイブしてから寝たきりになっていたあの2年間のことを…その間に俺は小学校を卒業して中学校に進んだのだが、俺の隣にこねえの姿はなく病院にてナーヴギアが頭に装着された状態で寝ていたのだ。俺はこねえが目を覚ますまでずっと学校のことやその他の他愛もない話をした。そして、ようやく目が覚めてからリハビリを乗り越えてまた同じ学校に通えると思いきや…こねえは西東京市にあるSAO生還者が通う特別な学校に通うことになって俺とこねえは初めて離れ離れになってしまったのだ。

「そっか、ごめんね…ずっと珪太にそんな思いをさせてしまって。私がいなくて寂しかったんだね…」

すると、こねえは作業を中断して俺を抱きしめる。こうやってハグされるのは何年ぶりだろうか：小さい頃はよく自分からおふぎげ感覚で飛び込んで甘えていたのだが、俺もこねえも成長して今となつては俺の方が身長が10センチ高くなりすっかり甘えたりする機会が減っていた。こうやって抱きしめられると心の暖かさが直に伝わり安心する。そんなこねえの目にはうつすらと涙が浮かんでいた：「こねえは悪くない：俺、こねえが眠っていた時から分かっていたんだ。一緒じゃないことは寂しいかもしれないけど、たとえどんなにこねえと離れていてもずっと俺達是一緒だよ：何があつても離れないって。だから泣かないで：」

俺は泣いているこねえを抱きしめ返して、彼女の頭を撫でて元氣付ける。こうやって自分から甘えているつもりが結局甘やかす形に逆転してしまう：それもあつていいのではないだろうか。

「そうだね。結局、珪太を元氣付けるつもりが私が元氣付けられちゃった：」

こねえは離れてからすぐに涙を拭い、笑顔を見せる。本当にその笑顔は可愛くて癒されてしまい思わずドキツとしてしまうのだ：実にズルい姉である。

「やべっ！こねえ、そろそろ行かないと遅刻しちゃうんじゃ：」  
「えっ？」

俺達が時計を見て時間を確認すると既に7時を過ぎていた。近くに通う高校がある俺はまだしもこねえは電車通学なので、このままだと遅刻は不可避だ：

「ごめん、残りのお皿は珪太が洗つてて：行つてきます！」  
「行つてらっしゃい：」

こねえは荷物を持って大急ぎで学校へと向かう。ここから最寄りの駅である地下鉄の大手町駅は走つても10分：果たして電車があるのかどうか心配だ。

(やっぱり、こねえは可愛いな：)

俺はそんなことを思いながら残りの皿とコップを洗うのであった。楽しい時は楽しみを分けあい、悲しい時は悲しみを分けあう：これが

俺達、綾野姉弟の日常である。

T o b e c o n t i n u e d …

## 女性観

side 珪太

こねえを見送ってからしばらくして、俺は家を出て学校へとたどり着く。学校は家から歩いて5分程度の場所にあるので、遅刻する確率は0に等しいどころかそれ以前も風邪等の病気で休まない限りは無遅刻無欠席、これが唯一の自慢である。

(さて、今日は何枚来てるのやら…)

俺がいつものように下駄箱を開けると山のように封筒が溢れ落ちる。これらは全部俺宛のラブレターだ…入学してから約1ヶ月、俺はとんでもないぐらいにあらゆる女子からモテているらしい。

「おっ…お前も相変わらずモテモテだな〜!」

すると、中学以来の親友である日高友亮が声をかけてくる。コイツこそが俺がモテる原因を作った張本人で、勝手にネット上に『綾野珪太ファンクラブ』というサイトを作っては俺の写真を無断に使い校内の女子を虜にしたのだ。あくまでも俺の自力ではない…

「友亮、お前のせいでこんなことになってるんだろが…少しは反省しろよな?」

「いいじゃねえかよ!チビ太っていかにも女の子にモテそうならいに童顔で爽やかなんだ、それを活かさずにどうする?お前の恋の手助けをしてやってんだから感謝しろっての♪」

「余計なお世話だよ…っていうか、チビ太はやめろ!」

本当に友亮がこうも立ち回るとろくなことがない。ちなみに、『チビ太』というあだ名が示すように俺(とこねえ)は背が低いことを気にしている…最近では身長が伸びてはいるが、小学4年ぐらいまではこねえと全く同じ身長でさらに昔に遡ると髪の毛の長さも一緒に髪型で同じ服装にしたらどっちかどっちかがややこしくなるぐらいに俺達は何もかもが瓜二つだった。それも、ルポライターをやっている親父が『キ●タマがついてない方が珪子、ついてるのが珪太』と言ってたぐらいに…

「ハハハ…まあ、誰を選ぶのかはチビ太次第だ。お前の人生はお前で

切り開けよ?」

「まあ、考えとくよ…つてか、チビ太言うなし!」

しかし、こうも俺を好いてくれる人がいてくれるのは決して嫌ではない。俺の悩みはそこではなくてその後の話で、実はこねえ以外の女の子に好意を抱いたことがないのだ。

「私、綾野くんのが好きです!だから…」

「すみません、付き合ってる人がいるんでお断りします…」

「えっ!?でもファンクラブには…フリーってありましたよ?」

「それは管理者の嘘です…貴方を騙すような形になってすみません。」

このように俺は毎回のように先輩同級生関係なく告白してきた女子を誰だろうと簡単にお断りしてるように見えるが、実を言うと俺はこの数十秒のやり取りの中でこねえを比較対象として付き合うかどうかの判断をしている。確かに、こねえに匹敵するぐらいに可愛い人もいるのだが…それより先の決め手となる要素が見当たらない。もちろん、付き合っている人がいるのも逃げる為の嘘である。

(はあ…恋って面倒くさいな。)

それから、俺はこのやり取りをこの日だけで8回(8人)も繰り返すのであった。自分が好かれるのはいいことではあるが、こんな風に何の縁もなく唐突に告白されるのは迷惑だ…それに、俺の中での『女の子』は実の姉であるこねえしかいない。本当に俺の女性観は世間からすれば狂ってるって言われても仕方ないだろうな…

~~~~~

「へえ、8人の女の子から告白されたんだ…珪太はモテモテだね。」

その日の夕食後(※こねえのプリンは美味しくいただきました♪)のこと、俺は今日の学校で起きたことをこねえに話す。ちなみに、この場にいるのは俺とこねえの二人だけ…親父はルポライターとして世界中を飛び回っており、母さんは看護師として当直が多い為家に

帰ってこれる日があつたとしても夜中に帰ってきてはまた翌朝には出勤という感じで休みも職場が大きな病院故に無に等しい。つまり、俺とこねえはほぼ二人きりという訳だ…

「うん…だけど、みんな断つたよ。」

「どうして?」

「俺と縁のない人ばかりだったからだよ…みんな友亮が勝手に作ったファンクラブのサイトを見て一目惚れした人ばかりだ。」

「ファンクラブってあの珪太の写真が沢山あつたサイトだよね?」

「そうだけど…つて、見たの!?!」

「うん、珪太が凄くかつこよく写つててお姉ちゃんとして素敵だと思つたよ。」

参つたな、まさかこねえにあのサイトを見られてしまったとはね。おまけに素敵と言われては照れてしまう…

「そ、そう…ところで、こねえって好きな人はいるの?」

「私!?今はいないかな…」

「今は?昔はいたつてこと?」

「そ、それよりも珪太はどうなの?お姉ちゃんの私に教えてもいいんじゃない?」

俺はこねえに好きな人がいるかを訊いたが、誤魔化されてしまい逆に尋ねてくる。好きな人か…俺も特にはいないけど、強いて言うのならこねえと俺は答えるだろう。しかし、俺とこねえは姉弟でお互いに好きだとしても恋人関係にはなれない。現実とは実に残酷なものだ…

「俺もいないかな…」

「そうなんだ。でも、いつかは珪太にも好きな人ができると思う…だって、珪太は優しくてかつこよくて面白いもん。誰よりも貴方を知ってる私が保証してあげる!」

こねえは笑顔で俺を励ます。しかし、励まされている相手は俺にとつてはただ一人の『女の子』だ…複雑な感情が渦巻く。

「ありがとう。それと、髪下ろしたこねえも可愛いな…部屋着も似合ってるよ。」

「えっ？珪太…」

「お、おやすみ!!」

俺はこねえの部屋着姿を褒めてこの場から消え去る。普段のこねえはツインテールで幼さの残る感じではあるが、髪を下ろしたこねえは大人びていていつもの可愛さと共に美しさも兼ね備えているのだ。…もしも、彼女が姉じゃなかったらこねえと付き合っていたことだろう。

(この気持ち、伝えられたらな…)

そんなモヤモヤが残る中、自分の寝室にあるベッドに潜り込むのであった。こねえのことで頭が一杯だからどうせ寝れないだろうけど…

To be continued…

## 瑠子の気持ち

side 瑠子

食器洗いをようやく終えて、私も寝るべく2階の自分の寝室へと向かう。階段を上がってすぐに瑠太の寝室があるのだが…

(開けっ放しだ…よっぽど疲れてたのかな?)

私は開けっ放しになっていたドアを閉めるついでに瑠太の寝相を確かめるべく部屋を訪れた。

(瑠太の寝顔、可愛いな。)

瑠太は私がいることなんて気にしていないような感じでぐっすりと寝ている。こんなにも安心したような感じできるとついつい癒されてしまう…

(それにしても、瑠太って最近…私のことを『可愛い』とか褒めるようになったような気がする。どうしてだろうか?)

そんな寝顔を見ていると最近の瑠太の言動を思い出す。彼は恋愛に興味を持っていないと言っていた割に私のことを異性として見ているようにも感じられる。

『ところで、こねえって好きな人はいるの?』

もしかして、この質問の意味は…そう考えると胸が切なくなってしまう。私の中で好きになった男の人は二人いて、一人はインクラッドで私(とピナ)を助けてくれた和人さん、そしてもう一人は弟の瑠太だ。和人さんに関しては今日奈さんとお付き合いしていることから既に諦めはついているが、瑠太に関しては姉弟故に付き合い合えないというもどかしさがある…好きなのにくつつくことはできない、姉弟とは複雑なものだ。

(瑠太が弟じゃなかったら…この気持ちを伝えられたのに。)

しかし、どうこう祈ったところで何も状況は変わらない。それが受け止めなければならぬ現実なのだから…それを変えようだなんて到底無理だろう。

「おやすみ、瑠太…」

私は開けっ放しだったドアを閉めて瑠太の寝室を後にした。

~~~~~

次の日の昼休みのこと、校庭にていつもだったら里香さんと二人でお弁当を食べているのだが…今日は明日奈さんも加わり三人で所謂女子会状態である。

「それで、明日奈…和人とはどうなったの？」

「どうって何が？」

「結婚よ！あんたと和人ってほぼ結婚してるような仲じゃないの…お互いに結婚できる年齢になる訳だしそんな話もあるでしょ？」

「うん…お父さんもお母さんも認めてくれたし、次の休みの日にキリトくんのご家族に報告するつもりよ。」

「ふうん…まあ、頑張つて！あたしは応援してるからさ。瑠子もでしょ？」

ついに明日奈さんも結婚か…思えば和人さんとはSAOでもALOでも夫婦関係である上にユイちゃんという娘もいて既にプロポーズも済ませている。そうなれば、結婚できる年齢にお互いになるであろう時期にこのような話が浮上してもおかしくはない…だけど、どこかで認めたくないと思う自分もいた。

「おーい、瑠子おっ瑠子さん？」

「あつ…はい！」

「どうしたの、さつきからポケットとして…まさかあんたも恋をしてるの？」

「そ、それは…」

「里香ったら、瑠子ちゃんをからかわないの！ごめんね…」

「いえ、大丈夫です！」

最近の私はどうも変だ…人が話をしている中でもいつの間にもやら考え事に溺れていて、周りの声が耳に入らなくなってしまうている。自分でも大丈夫なのかと不安になってしまう…

「とにかく…悩みがあるんだったら、あたしか明日奈に相談しなつて。いつでも相談になるからさ！」

「ありがとうございます…だけど、今は大丈夫です。」

そうは言つても、私が抱えている悩みは明日奈さんや里香さんに話して解決するものだろうか…普通の恋愛相談であれば乗ってくれるとは思うけど、あたしの場合はその相手が弟の珪太だ。そんなことを言えるはずがない…

キーンコーンカーンコーン

その時、昼休み終了10分前のチャイムが鳴り響く。次の5時間目は全クラス合同の体育である。

「ねえ、次って体育…だよね?」

「やばっ!早く行かないと…ウチの体育の先生は厳しいから1秒の遅刻も許されないから怒られるわよ!?!」

「そうね、急ぎましょう!」

「ちよつと、待ってくださいよ!」

こうしてチャイムを合図に明日奈さんと里香さんは大急ぎで教室へと一旦戻り私もその後を追っていく。それから着替えて集合場所のグラウンドへとまたダッシュ…なんとか授業開始には間に合ったが、開始前からヘトヘトになつてしまふのであつた。

~~~~~

「ただいま…」

そして、学校が終わりやつとの思いで家にたどり着く。ただでさえ疲れてる中でさらに体育で身体を酷使した上にその次の授業は移動教室の科学…火曜日の午後は毎週のようにこのような地獄な組み合わせである。

「お帰り、こねえ…つて、どうしたの?」

「ごめん、ちよつと疲れちゃつたみたい…しばらく休ませて。」

私はリビングへと向かって早速ソファに腰かける。やっと座れるものに出会えた…そう思えてくると身体の力がフツと抜けていく。

「随分とお疲れだね…はい、お水。」

「ありがとう、珪太…」

珪太は冷蔵庫に入っていた水を私に手渡す。本当にこのように親切で気の利く弟がいて助かった…

「こねえって昔からそうだけどあんまり体力がないよね…(SAOから)こっちに戻ってきてから少しは身体能力は上がったけどさ。」

「珪太は男の子だからでしょ…私と違ってスポーツは何でも得意だったよね。」

「昔の話だって、今の俺はもう満足にスポーツなんてやれないよ…」

ちなみに…珪太は小学生の時から野球をリトルリーグから中学の軟式までやっており、その当時の彼は俊足巧打で左投左打の外野手兼一塁手として打順は不動の1番として活躍していた。中学2年の時の試合中に怪我をして以降は満足なプレーもできずにメンバーから外されてしまい野球を卒業と同時に断念、高校に進んだ新聞部として週2回活動している。(家のことは交替で回している)

「それよりも、こねえ…疲れてるならマッサージをしてあげようか?」

「えっ?!いい、いいよ…別に!」

すると、珪太はいきなりマッサージがしたいと言ってきた。私は当然のように断ろうとする…別に嫌ではないのだが、理由は別にある。(言いたくはないけど…)

「遠慮はしないでいいよ。俺のマッサージは友達からは評判なんだぞ?それに、こねえが辛そうにしているとところを見たくはないからね…」

「そう…じゃあ、お願いします。」

このように心配されると私は断ることができなくなってしまう。本当に珪太はズルい…

「随分と肩がこってるね…どう、気持ちいい?」

「うん、肩が軽くなった気がする。ありがとう…」

「これからも疲れた時はやってあげるからさ…その時はよろしく頼むよ。」

珪太は満面の笑みを浮かべながらマッサージを続けていく。小さい頃、一緒に出かけた時によく繋いでいた暖かい手が私の肩を軽くして癒してくれる…少し恥ずかしさはあるが、それよりも嬉しいという気持ちで勝るのであった。

(珪太、いつもありがとう…大好きだよ。)

T o b e c o n t i n u e d …

## 好奇心

side 珪太

「ただいま〜!」

俺は部活を終えて家へとたどり着く。しかし、いつもだったら『おかえり』と言ってくれるこねえからの返事がない…

(夕飯の準備はできている…ってことは、一つしかないな。やってることもある場所もね!)

そして、向かった場所は階段を上がってから右に曲がった奥にあるこねえの部屋…ここにいるはずだ。

「お邪魔します…って、そうだと思ってたよ。」

ドアを開けると、そこにはベットに寝転がっているこねえの姿があった。アミューファイアを装着しているということはゲームにログインしているという訳だ…それも着ている衣服がワイシャツだけというだらしなな格好のままである。

(やれやれ、帰ったらすぐ着替えろと言う姉がこれじゃあどうしようもないよな…)

ゲーム中のこねえを見て流石に俺も呆れてしまう。いつもは少し天然だけどしっかりしているこねえがこんなだらしなくては弟として情けない…

(それにしても、実にイヤらしい格好だ。俺が彼氏だったら確実に襲ってるな…)

「ん…」

「!?!」

すると、突然こねえが目を覚ましてはアミューファイアを取り外す。どうやらやっていたゲームが終わったようだ…

「えっ?」

目を覚ましたこねえは俺を見て驚き顔を赤らめる。どうやら自身の状態と目の前の状況を把握したらしい。

「お、おはよう…こねえ?」

「いやあああああああ!!」

「ぎゃあああああああ!!」

そして、俺はこねえから酷い目に遭わされるのであった。半分は（いくら実姉とはいえ）異性の部屋に勝手に入り込んだ俺の自業自得ではあるが、流石に実の弟を下着泥棒か何かと同じように痛めつけるのはいかがなものだろうかと思う。

~~~~~

「こねえ、本当にごめん…」

「ふんっ！」

しばらくして夕食の時間を迎えたものの、こねえの機嫌はどうやら直りそうもない…おまけに、俺の殴られたり引っ掻かれた痛みは引きそうもない。実を言えば俺達のルールとしてこねえの部屋に勝手に入ってはいけない（ただし、こねえは俺の部屋に入っても問題なし）というのがあるのだが…それに関しては何度も破ってしまっており、その度に許してもらっている。（色んな手を使って…）

「それじゃあ、ケーキ5個！これで許してくれるかな？」

「…」

ケーキ5個を提示してみるがこねえはそっぽを向いたまま無反応だ。何回もルールを破れば流石に女神のこねえもただでは許してくれないかもしれない…こうなったら財布の危機も承知だ！

「だったら、高級アイスも追加！これで許してください!!」

俺はさらにスーパーに売ってある高級ブランドのアイスを追加して食い下がった。これでダメなら俺は二度と許されることはないだろう…これで許してもらえるのなら高級アイスなんて安いものかもしれない。

「うっ…今回は許してあげるけど、次はないからね？」

とりあえず、こねえはこういうことにチョロいということは前々から知っていたので予測できていた。やっぱりそこは普通の女の子な

のだろう…

「それでさ、訊きたいことがあるんだけど…こねえのやつてるAL  
Oってどういうゲームなの？」

「そうだね…簡単に言えば仮想空間で妖精となって他のプレイヤーと  
冒険するゲームだよ。」

「なるほど、それは楽しそう！」

まさにVRならではのと言えるだろう…妖精となって空も飛ぶつて  
だけでも面白そうなゲームである。俺も昔はよくこねえとゲームで  
対決していたけど、こねえの簡単な説明からしてそれらよりもきつと  
面白いのかもしれない。

「もしかして、珪太もやりたくなつた？」

「俺もやりたいに決まつてるじゃん！こねえが楽しくやつてるゲーム  
を俺がやらない訳にはいかないでしょ？」

「でも、ちよつと無理かな？珪太は昔から高所恐怖症だから空を飛ん  
ただけで『怖いよ』なんて言うんじゃないの？それに、アミუსフイ  
アは私のしかないし。」

「それもそうか…」

そう言われるとその通りだ。俺が高所恐怖症なのはどうであれ、ア  
ミウスフイアはこねえのヤツしかない…まさにゲームに慣れる慣れ  
ない以前の事態だ。

「とにかく…好奇心だけでやるようなゲームじゃない、これだけは  
言っておくね。ごちそうさま…」

それだけを言い残してこねえは食べ終わった食器とコップを片付  
けて自分の寝室へと消えていく…その背中を見て俺の中で何かが動  
くのであった。

(好奇心だけ…か。見てろよ、こねえ…必ず見返してやるからな！)

~~~~~

「ありがとうございます。」

翌日の放課後、俺は口座に預けていた全額を引き下ろしてからゲームショップに立ち寄っては念願のALO：『アルヴヘイム・オンライン』の中古ソフトと中古のアミュスファイアとオーグマーの特典付きセットを購入した。お値段は合計で所持金の半分である僅か3万という破格の安さだ：その理由は噂によると近い内にアミュスファイアに代わるフルダイブデバイスが出るのではという話が浮上しているからである。その為、アミュスファイアやそれに対応するソフトだけでなく最近起きた『オーグマー事件』の原因となったオーグマーの売上低下もあって、それらの商品が全国各地のゲームショップにて大安売りされるといふ異常事態が発生しているのだ。俺からすれば安くゲットできてラッキーな話だけど：

「よお相棒！随分と上機嫌じゃねえか？」

すると、親友の友亮がいきなり俺の目の前にひよっこりと現れる。

本当にコイツは神出鬼没だ：

「友亮、今日は部活じゃないのか？」

「いやあ、キャプテンが『好きなアニメを今週こそは絶対リアタイで観たい！』って言うから急遽休みになっちまってよ…」

それにしても、こんなラグビー部で大丈夫なのだろうか？もうすぐ都の高総体が控えているのに練習をサボっていたら勝てるものも勝てない。だから、ウチのラグビー部は毎年初戦敗退を繰り返しているのだ。

「だったら自主トレをすればいいじゃないか。いちいち俺を冷やかすに来る必要はないだろ？」

「そんなこと言うなつての！俺とチビ太の仲じゃねえか：：なっ？」

「だからチビ太はやめろつて何度も言ってるだろ：：それで、俺に何の用？」

「お前がゲームショップから出てきて楽しそうだったから声をかけてみたんだが：：何を買ったのか？」

「ああ、俺もVRゲームをやってみたいと思ってね：：ALOを買ってみたんだよ。アミュスファイアもオーグマーもセットで3万だぜ？ど

うだ！」

「俺の時よりもめっちゃくちや安いじゃねえか…運の良いお前が羨ましいぞ?」

友亮はこう言うが、運の良し悪しではなくて単に今のゲーム業界の事情が色々とぶれてる時期に買っただけであり特別に褒められることでもない。(運が良いのは確かだけど…)

「いやいや、そんなもんじゃないよ…っていうか、お前もALO持つてるんだな。それじゃあ、明日一緒にやろうよ。お互いに部活は休みだしさ！」

「OK、お前に妖精の世界のいろはを叩き込んでやるから覚悟しとけよな?」

「それじゃあ、また明日な…」

「ああ！」

そして、俺は友亮とALOで遊ぶことを約束して帰路に就く。いよいよ明日、俺にとつての新しい冒険が始まる…そう考えると胸の高鳴りが止まらなくなった。

To be continued…

## ALLO 《アルヴ Heim・オンライン》の世界

side 珪太

念願のALLOを購入した翌日、俺は夕食を食べてから自分の部屋に戻ってからゲームのセットアップを進めていく。休みの日のこねえは夕食を食べた後の時間はほとんどALLOにログインしていて、今日に關しても『クエストに行くから、勝手に（部屋に）入ったらダメだからね?』と釘を刺されたのだ。事情はどうであれ懲りずに同じことを繰り返していればそうなっても仕方ない。そこは俺も反省しないとね…

（さてさて、準備はOK！俺もログインしようつと…）

セットアップが終わり俺はアミユスフィアを頭にセットして電源を入れる。ついに俺はこねえと同じ土俵に立てる…そう思うと胸の高鳴りが止まらなくなった。

（リンク・スタート！）

俺はついにVRの世界への入口を切り開く…まず最初に目が覚めると暗闇の空間があつて、そこには早速プレイヤーの名前を入力する画面があつた。

（しかし、どういう名前にしようか決めてないんだよな…仕方ない。）

とりあえず、〔KEITA（ケイタ）〕と自分の本名を入力画面に打ち込んだ。あくまでもこのゲームは勢いだけで始めたものであるが故にプレイヤーネームどころか今後の方針なんて何一つ決めてすらないし、その上こねえや友亮からは一切攻略法すら聞いていない…要するに俺はノープランでこの世界へと足を踏み入れる訳だ。

（次は種族の選択か…）

名前を入力して次に待つのは種族の選択…何が得で何が損なのかはよく分からない。シルフ、サラマンダー、スプリガン、ケットシー、ウンディーネ、ノーム、インプ、レプラコーン、プーカと全部で9の種族が存在しているが、その中でケットシーに目をつけた。

（見た感じは猫の妖精かな?これは面白そうだ…決定つと!）

俺は迷うことなくケットシーを迷わず選択する。个性的な物や事

柄を好むのが昔から続く俺の癖なのだ…そうならば選ばずにはいられない。

(こねえ、俺もALOに行くよ…立派になって会いに行くからね!)

そして、満を持して俺はALOの世界へと飛び込むのであった。容姿はランダムで決まるとのことなので、どういう姿で送り込まれるのかは分からないが…せめてはダサイようなルックスではないことを祈りたい。

~~~~~

「ここは…」

再び気がつくと、今度は辺り一面がまるで別の世界みたいな感じの街が広がっていた。

(とりあえず、友亮を待たせてるからそこまで歩くか…場所は知らないけど。)

そこにいる人…もとい、妖精達はみんな猫耳に尻尾がついている。つまり、ここにいるのは全員ケツトシーでここはケツトシーだけの街なのだろう…これなら現状と辻褄が合うはずだ。

(それにしても…歩く感覚だけじゃない、全ての感覚がまるで現実世界と似ている。街並みといい妖精達の動きといいゲームとは思えない…この世界をこねえは冒険してるんだな。)

「おう、ここらじゃ見かけねえ顔だな…」

「…誰だ!？」

すると、俺の背後からいきなり一人の男が声をかけてくる。振り返ってみるとそこには赤いツンツンヘアードいかにも厳つそうな大男がいた…猫耳はないということは同じケツトシーでないことは確かだ。セレクト画面を思い返す限り髪色からして彼の種族はサラマNDERで間違いない。

「そんな怖い顔をしなさんなつての!小せえのに随分とガッツがある

じやねえか。まるで、ダチのチビ太を思い出すぜ…」

ダチのチビ太？それに、よくよく考えてみればこの声も聞き覚えがあるし髪型も顔つきも色を除けばある一人の男にそっくりだ。

「お前、友亮だな…」

「おつ、ご名答…つてことはお前はチビ太だろ？」

「だから、チビ太はやめろつての！何でお前がケットシーの街にいるんだよ？可愛い子ちゃんのナンパか!？」

「当たり前じゃねえか…ケットシーの女の子には可愛い子ちゃんがいっぱいで、ナンパのスポットとしてはもつてこいだぜ♪」

コイツはどこに行っても女誑しは治らないらしい…何しろ、友亮がラグビーを始めた動機が『女にモテるから』という理由だっただけでなく部活が休みなら渋谷でナンパをするというとんでもないアホなのだ。かつては渋谷でのストリートファイト（喧嘩）で不敗神話を築いた男も更正を通り越して今となってはすっかりと落ちぶれてしまった…

「友亮、初心者の俺が言える立場じゃないけど…ゲームでも女遊びは大概にしろよな？そもそも、このALOはそんなゲームじゃないだろ…」

「まあ、本来のコンセプトはそうじゃねえけどよ…つてか、ここで友亮と呼ぶのはやめろ！俺だつてこの世界には名前があるんだよ…」

「それじゃあ、俺のことをチビ太と呼ぶのはこっちでも現実でも金輪際やめてくれ…これで貸し借りはなしだろ？」

「仕方ねえ…ここでの俺の名はジーク（GEEK）だ。お前は？」

「俺のは本名と同じケイタだ。よろしくな、ジーク！」

「ああ、こちらこそ頼むぜ…ケイタ！」

こうして、俺はジーク（友亮）と共にALOの世界を冒険することになった。この先にどんな道のりが待っているのかは分からないが、コイツと一緒に怖いものはない！そう信じて歩くのであった…

~~~~~

「ところでケイタ、どうしてお前はALOをやろうって思ったんだ？」  
この世界の首都であるユグドラシルシティへと向かう道中にて、いきなりジークが俺にこのゲームを始めた動機を訊ねてくる。動機と言える動機はないが、あるとすればただ一つだろう…

「どうしても会いたい人がこの世界にいる…それが理由かな。」

「会いたい人ってまさかお前の恋人とかか？」

「違うって…会いたいのはこねえだよ。」

「ああ、珪子さんのことか…でも、リアルでは珪子さんと家族で一緒に住んでるし、そもそも珪子さんもこのゲームのプレイヤーなのか？」

「こねえも一応このゲームのプレイヤーらしい。かつてはSAOもやっていたから…もうVRゲーム歴は4年ぐらいかな？」

「マジかよ!?俺の倍もVR慣れしててその上SAOサバイバーだとは…相当の強者だぜ。」

ジークはこねえのダイブ遍歴を聞いて驚きのあまりに言葉を失ってしまう。おまけに、SAOサバイバーであることも話しただけで絶句とは…この世界においてSAOを生き残った者達がどれだけ恐れられているかが物語られている。

「まあ、俺はこの世界のこねえを知らないからね…一度は会ってみたかと思ってるんだ。」

「なるほど。丁度いいタイミングだな…実はいい情報があるんだけど、聞いていかねえか?もしかしたら、お前の目的に役立つかもしれないぞ!」

「まさか、お前…この世界のこねえと会ったことあるのか!？」

「それは定かではないけどよ…お前に似たケットシーの女の子を見かけたことがあるんだぜ?」

「俺に似たケットシー…そんなにその子と似てるのか?」

「ああ、そっくりだったさ…俺はこれまでに見た女の子の顔は二度と忘れないから自信はある!」

ジークがそこまで言うのなら間違いないだろう…この瞬間俺は確信した。そのケットシーがこねえであるということを一！

「それで、彼女がどこで何をしてるかってまでは分かるか？」

「詳しくは分からねえけど、ある剣士と活動を共にしているからソイツに訊けばいいさ。ただ、その剣士はとんでもねえ野郎らしいんだ…」

「とんでもない?」

「ああ、ヤツの名はキリトと言ってな…PKでは無敗と噂される最強の剣士らしいが、あまりの強さから黒い噂が立っているらしいぜ?例えば、チートスキルを悪用してたりとか平気でプレイヤーのHPを0にするどころかささらには身内のヒーラーまでも巻き込んでギルドを壊滅させた…なんて話もあるらしい。」

そんな剣士がこのゲームにいると知り、俺は正直恐怖を感じた。こんなヤツとこねえはつるんでいたのか…怒りやら危機感が沸々と込み上げてくる。

「そんなヤツもいるんだな…」

「ああ、だからキリトだけは気をつけな?アイツに会ったら即死…」誰に会ったら即死だって?」…えっ!」

すると、俺達の背後から声がして振り返るとそこには背中に剣を背負った黒髪の男が立っていたのだ。まさか、この男があのかのキリトなのだろうか…俺達の運命はいかに!?

T o b e c o n t i n u e d …

# Silica

side ケイタ

俺達が振り返ったところに現れた黒髪の剣士、髪色からして種族はスプリガンだ。それにしても、何もしていないにも関わらずに漂うこのオーラ…彼は一体何者だろうか？

「ジーク、彼のことを知ってるのか？」

「ああ、アイツこそがALLO最強にして最凶の剣士…キリトだ！」

「何だって!!」

ジークは目の前の剣士を指差しながら小声で彼が噂のキリトであることを小声で伝える。彼がこねえを危険な道へと導いている野郎なのだろうか…見た目だけで判断してもそうとは言い難いが、ここは慎重に接していかなければならない。

「あ、あの…貴方がキリトさんですよね？」

「ああ、そうだけど…」

「噂はかねてより聞いています。俺の姉がお世話になっっているようで…そこでお願いがあるんですけど、これ以上姉を悪事に巻き込むのを止めてもらえないでしょうか？」

「えっ？何のことかサツパリなだけど…っっていうか、君は誰なんだ？」

「俺の名前はケイタです。姉はこっちの世界ではケットシーとして活躍をしているらしくて、キリトさんと一緒に冒険していると聞いています…」

「いや、君のお姉さんが誰かは知らないけど…その人を悪事に巻き込んだことはないし、そもそもそんな風に言われることをした覚えはないだけど？」

「えっ!？」

キリトさんはジークが吹き込んだ噂を全否定する。なるほど、どうやらジークは嘘を俺に吹き込んだらしい…何が理由かは知らないが、これは許されることではない。

「まあ、誰が噂を広めたのか見当はついてるよ…犯人はお前だろ、ジーク

ク！」

「さ、さあ…何のことやら？」

「とぼけるな！お前が身の回りのプレイヤー達に俺が凶悪な剣士だの話していたとその人達から聞いている…いい加減観念したらどうなんだ？」

キリトさんから圧をかけられ、流石のジークにもいつものような堂々とした態度が見られない。大胆不敵な彼をここまで追いやるのは…最強の剣士であることは少なからず事実らしい。

「すみません、旦那…もうしませんから許してください！」

「分かった。もう二度とそのような真似はするなよ？」

「は、はい!!」

こうして、何事もなく事件は解決した訳だが…まさか人に頭を下げるどころか過ちを謝ることすらしないジークがすんなり頭を下げてしまうとは思ってもいなかった。それからしばらくして、今度は俺の近くまで歩み寄る。

「さて、ケイタだったかな…俺のパーティーの中に君のお姉さんがいるって言ってたけど、それは本当なのか？」

「はい。ジークの話だと同じケットシーで俺に似ているらしいって言ってましたけど…」

「ケットシーで君に似ている…多分、シリカだろうな。」

「シリカ？」

「ああ、あの子も弟がいるって言うていたんだ…会ってみれば分かるよ。俺で良ければ案内するけど？」

「お願いします…」

俺はキリトさんの後を追ひ、こねえのアバターであろうシリカという人のところへ案内してもらうことにした。

「ちよつと待て、俺は?!」

「お前はここにいとけ！どうせ人の遠慮なく手を出すだろうからな…」

「待てって、俺は手を出さねえし反省してるっての!!」

そんな中でジークは反省の意志を伝えているようではあるが、俺は

徹底的に無視をした。ここで止まったらアイツのことだから上手いようにやられてしまうのがオチだ：親友だからといって俺は全てを信じている訳ではない。

「君、容赦ないな…」

「アイツほど真面目に信じ込むと危ないヤツはいませんから。」

その後、俺は道中でジークとキリトさんの間に何があったのかを聞き出したら：アイツが『俺様は最強だ〜！』と言い出してキリトさんに喧嘩を売ったらしい、結果はもちろんキリトさんの圧勝。負けたアイツは逆恨みで周りのプレイヤーに『キリトは最強最悪の剣士』等という根も葉もない噂を流し続けていたとのこと：最早フオローする言葉が見当たらない。

~~~~~

歩くこと数分、俺達はキリトさん達の仲間がいるであろう鍛冶屋にたどり着く。

「ケイタのお姉さんはここで待っているんだ。時間带的には既に全員集合かもしれないな…」

「すみません、色々キリトさんにはご迷惑をおかけして…」

「俺は大丈夫だよ。いつも周りのパーティーメンバーから振り回されてるからな：君の友達が周りに迷惑をかけたかもしれないけど、それに比べて君を助けることぐらいどうってことはないさ。」

なるほど、キリトさんも色々苦勞してるんだな：それに比べて俺は何でもこねえに甘えてばかりだから何の苦勞も味わっていない。キリトさんみたいなタイプの人って相当モテるんだろうな…

「随分と遅かったじゃない：黒の剣士様が遅刻とは珍しいわね？」

鍛冶屋の扉を開くと早速ピンク色の髪をした女性プレイヤーに出会う。どうやらキリトさんの知り合いのようだ…

「この子を助けていたんだ。どうやらビギナーでここに会いたい人が

いるらしい…」

「ビギナーね。それにしても、この子ってシリカに似てるような似てないような…気のせいかしら?」

すると、女性プレイヤーの口から『シリカ』という名前が出てきた。やはりキリトさんの言っていたことに間違いはない…ここにこねえはいるようだ!

「すみません、シリカという方をご存知ですか?俺、その人に会いたくてここに来たんです…どうか会わせてください!」

「わ、分かったわ…案内してあげる。」

俺はキリトさんと一緒に女性プレイヤーに案内されて鍛冶屋の中へと入る。内装を一通り見渡してみると、まるで西洋の山の中にあるような家みたいに綺麗だ…改めて本当にゲームなのかと疑ってしまう仕上がりと見えよう。

「みんな、キリトがお客を連れて来たわよ!」

こうして中に入るとそこには既に待っていたプレイヤーが4人が俺達の前に歩み寄ってきた。見た限りケットシーが2人でウンディーネとシルフが1人ずつという感じである…

「キリトくん、遅刻だよ?」

「ごめん、ちよつとビギナーの彼がどうしてもここに用があるって言ってたからね…道案内したんだ。」

キリトさんはウンディーネの女性プレイヤーと楽しそうに話している。しかしながら、この人は随分と美人なお方だ…

「それも、シリカに用があるとか言ってたけど…」

「私にですか?」

すると、俺の耳に聞き覚えのある優しく心地よい声が入ってくる。そして、『シリカ』というハンドルネーム…これは間違いない!

「こねえ、こねえだよね?俺だよ、ケイタだよ!綾野珪太!!」

「け、珪太!?どうしてここに…何でこのゲームにいるの?」

「シリカ、もしかして…」

「この子ってまさか?」

「はい、私の弟です…」



## 冒険の始まり

side ケイタ

俺がこねえの弟だと発覚した瞬間、この空間が一瞬静まり返っていた。それとは打って変わって今は女性陣（こねえともう一人のケツトシーの方は除く）から囲まれている状態だ…

「君がシリカちゃんの弟くんなんだ。男の子なのに可愛いんだね♪」

「アスナさん、ずるいですよ…私だってケイタくんとお話ししたいんです！」

「ちよつとちよつと…あたしだって話がしたいんだから!!」

こんな感じで俺はゲームでも絶賛モテ期に突入したようだ。これはつまり、それほどこねえがみんなから愛されている証拠とも言えるだろう…

（それにしても、こんなに美しいお姉さん方に囲まれるのも悪くないな…）

見た感じからしてこねえ以外の女性方はみんな俺よりも年上、この光景は正直言ってジークに自慢したいくらいである…女性からモテるってのも案外幸せなものだ。

「ちよつと…ケイタが困っていますから、皆さん落ち着いてください！」

そんな雰囲気の中でこねえが俺らの間に割って入り取り囲む女性方を落ち着かせる。別に俺は困ってすらいない、むしろこの感覚をもっと味わいたかったぐらいだったな…

「それじゃあ、私のパーティーの仲間を紹介するね…まずはキリトさん、このパーティーのリーダーをやっているんだよ。」

「リーダーって…まあ、よろしく頼むよ。」

キリトさんは少し照れくさい感じで返事をする。彼は案外持ち上げられるのは恥ずかしいのだろうか…これまでの堂々とした様子もいけど、こういう意外な一面があるってのも魅力的と言えよう。

「その隣にいるのが回復担当のアスナさんだよ。」

「よろしくね、ケイタクん♪」

「ハ、こちらこそ…」

それにしても、アスナさんって綺麗なお方だ…見た感じ年上のお姉さんみたいな雰囲気でごねえとは対照的なタイプである。

「どうしたの、ケイタ?」

「いや、何でもないよ?大丈夫!」

危ない危ない、折角ごねえがメンバーを紹介してるってのにアスナさんの美貌の虜になりかけるところだった。これがバレたらどうなることか…想像するだけで恐ろしい。

「そう、じゃあ続けるよ…その隣にいるのは魔法と剣を扱わせたら超一流のリーファさん。この中ではA.L.O歴が一番長いから、困ったことがあったら頼りにしてね!」

「シリカちゃん、そんなに褒めないですよ…照れるなく!」

リーファさんはごねえの紹介を聞いて照れてしまう。なるほど、彼女はこれの中では一番の先輩プレイヤーって訳か…この世界を知り尽くしているのであれば非常に頼りになる存在だ。困ったことがあったら真っ先に相談してみよう…

「それと、リーファさんはキリトさんの妹さんでもあるんだよ。」

「そうなの!?全然似てないんだけど?」

「まあ、種族が違うし実の兄妹じゃないからね…でも、お兄ちゃんのことはいつも大切に思ってるよ。ねっ♪」

「お、おう!ありがとな…」

なるほど、キリトさんとリーファさんのところも仲良しなんだな…詳しい事情はともかくとして、こういう風に仲良しの兄妹というのは実にいいものである。

「それじゃあ、紹介に戻るね…その隣が私やケイタと同じケットシーのシノンさん!射撃に関しての腕前はNo.1だよ♪」

「よろしく…」

シノンさんは随分クールなお方だ。クールビューティーってのも悪くないかもしれない…そんな中で少し照れてるといいうのも実に美しいものである。

「これで今回は全員…」

「ちよいちよいちよい！あたしを忘れてどうするの!？」

すると、紹介を忘れられたガイドの女性がこねえに突っ掛かる。

「すみません、忘れてました…それでこの人はリズさん、私達のパーティーの武器を作っている鍛冶職人だよ。」

「あんたがシリカの弟ね…期待してるわよ?」

「はい、よろしく願います!」

こうして、この場にいるパーティーメンバーの紹介は終わった。このパーティーには個性豊かな面々が揃っていて、その中にこねえがいるということが自分のことみたいで嬉しく感じる。こねえは昔から友達が少なくて周りから見れば地味な女の子だったのだが、今のこねえは俺だけじゃなくてみんなと楽しく笑い合っているのだ…これも全てSAOやこのALOをやっていた中での成長なのかもしれない。

「他にも二人メンバーがいるんだけど、お仕事が忙しくて最近は滅多に来れないから…今は大体このメンバーでクエストに挑んだりしてるんだ。」

「なるほど。それで…一つ気になることがあるんだけど、いいかな?」

「いいよ。分からないことがあったら何でも訊いてね!」

こねえはお姉さんのような堂々たる表情で質問を待つ。こういうところも本当にお姉さんらしく感じる…

「俺やシノンさんもそうだけど、ケツトシーの耳や尻尾の触り心地ってどうなのだろう?」

「えっ!？」

「いや、どういう感覚なのかちよつと気になっちゃってね…要は触らせてくれて話だよ。いいかな?」

「それは…」

「ケ、ケイタ…それだけはやったらダメだ!」

すると、キリトさんがいきなり慌てるように俺達の間を割って入る。何かまずいことをしたのだろうか?」

「どうしてですか?」

「それはだな…ハラスメントコードというシステムがこのゲームには

存在するからだよ。」

「ハラスメントコード？」

「ああ…ケイタがシリカの尻尾を触ったり等と嫌がらせをしたら、被害者の判断によつては君が牢獄送りになってしまうことにもなりかねない。」

「そんな!？」

牢獄送りか…ゲーム上での牢獄がどういうものなのかは想像できないが、キリトさんの言い方からして地獄を見ることは事実だろう。

「とにかく、ケットシーの尻尾とか耳を触ったらいけないという訳だ…いいな?」

「それってあんたが言えることかしら?」

「シノン!？」

その時、同じケットシーのシノンさんもやって来ては彼を威圧するように睨みつける。二人の間に何があったのかはある程度察しはつくが…

「シノンさん、もしかしてキリトさんは…」

「想像の通りよ…私、キリトから尻尾を触られたの。それもクエストの最中にわざとらしくね!」

「それって本当ですか!？」

「返す言葉ありません…申し訳ない。」

キリトさんはすんなりとシノンさんに頭を下げ謝る。なるほど、彼は女性の前だと頭が上がらないタイプなんだな…意外な一面を知ることができた。

「ケイタくんも尻尾とか触ったら…覚悟はできてるわよね?絶対に容赦しないから。」

「えっ!?は、はい…」

そして、その怒りの矛先は俺にも向いた。彼女の表情は微笑みの女神ではあるが、纏うオーラの圧が凄すぎる…一見はクールだけど、怒らせるとただでは済まなそうだ。

「まあまあ…それよりも早速クエストに行こうじゃないの!ケイタも退屈してるだろうから。」

変な雰囲気になりそうだったタイミングでリズさんが間に割って入り何とか助かりそうな見込みだ…

「そうだな。まずは森に行ってケイタのスキルアップからやっつけていこう！リズには彼の武器選びを任せるよ。」

「了解。ケイタには初心者向けだけとっておきのヤツを用意してるから…それを使うといいわ。」

「本当ですか!?!ありがとうございます!」

こうして俺はキリトさんを中心としたパーティーメンバーの下で行動することになったのだが、この後にあのような出来事が起きようとは誰が想像したのだろうか? いや、できる訳がない…

To be continued…

## 引き裂かれる姉弟（前編）

side ケイタ

それから俺達は森の中へとたどり着く。鍛冶屋から森までの道のりはやはり妖精であるが故に空を飛んだのだが、他のみんなは流石プレイ歴が長いだけあって上手だった。それに対して俺は何度バランスを崩したことだろうか…やはり人間にはない物を操るにはとにかく慣れるしか方法はないのかもしれない。

「よし…まずはケイタにスキルアップをやってもらおうか。」

「スキルアップ？何をすればいいんですか？」

「ああ、君には今から出てくるモンスターを退治してもらおうんだ。今のレベルだとみんながいるとはいえこれから挑むクエストは難しい…そこで、ある程度レベルを上げてスキルも取得するのが今の君には先決だと思ってね。」

俺はそう言われて自分のスキルを確認すると、見た限りは明らかに初期のスキルである。これでは某RPGゲームのス●イムみたいな雑魚にすら太刀打ちできないだろう…

「とりあえず、敵のモンスターがどこにいるかをユイ探してもらおう…ユイ、出てこい！」

「ユイ？」

キリトさんが『ユイ』と名前を呼ぶと、テ●ンカーベ●サイズの小さな妖精の女の子が召喚される。

「どうしましたか、パパ？」

「パパ!？」

ユイちゃんはキリトさんのことをパパと呼ぶ。いくら同じ妖精とはいえサイズは一回りも違うし、似てる要素が見当たらずだ…どういうことなのか理解が追いつかない。

「どうしたんだ？」

「あ、あの…そのユイって子は貴方の娘さんですか？」

「はい！私はパパとママの娘です♪」

「えっ？」

すると、キリトさんとアスナさんを指差してユイちゃんは二人を『パパとママ』と呼んだ上でその娘だという爆弾発言をした。いやいや、この二人を足してもこの子に引き継がれる要素はないだろう…さらに理解できなくなり混乱する。

「ゆ、ユイちゃん！ 恥ずかしいからあまりよその人には言わないでつて言ったはずだよ!」

「そ、そうだぞ?! 俺達の関係をビギナーに話したらややこしくなるから!」

二人は慌ててユイちゃんを説得しようとする。彼女は どうしてなのかと言わんばかりにきよとんとした様子で理解しているのかがうやむやだ…

「すみません…お二人がそのユイちゃんのご両親というのは本当でしょうか?」

俺は迷わずキリトさんとアスナさんにユイちゃんとの関係性を訊ねる。本当の親子だとしたら別に知られてもいいはずなのだが…

「まあ、ある意味本当だよ…なあ、アスナ?」

「そうそう、私達は…ね!」

何か怪しいかもしれないが、これ以上深掘りするのはゲーム空間上ではタブーだ。腑に落ちない部分もあるが二人を信じるでしょう…

「とりあえず、信じますよ。それで、君がユイちゃんかな?」

「はい。私がユイですけど…」

「俺はケイタって言うんだ。今後も一緒にパパ達と冒険すると思うから、よろしく!」

「こちらこそよろしくお願いします、ケイタさん♪」

こうして、俺はユイちゃんとも仲良くなるのであった。また友情の大きな輪が広がっていく…

「それで、ユイちゃん…もし良かったらパパに関する貴重な話とか教えてもらえないかな? できることなら…「ケイタあく?」…こ、こねえ!」

すると、背後から怒りのオーラを纏ったこねえが忍び寄っては俺を睨みつける。これは逆らうと無事で済まないだろう。

「みんなと仲良くなるのもいいけど、ケイタの為にわざわざスキルアップに協力してるんだから…迷惑をかけたらダメだからね？」

「は、はい…」

こねえは今にも火山が噴火しそうな感じで俺を威圧してくる。これはマジギレの一手手前と言えようか、本気で怒らせたこねえは俺でも制御できないぐらいに恐ろしいものだ。怒らせて得する点など存在する訳がない…

「シリカってケイタと一緒にだとイキイキしてるわね…シノンもそう思わない？」

「私もこんなシリカは初めて見たわ。やっぱり、弟の前だとありのままの自分を出せるのかしら？」

後ろでリズさんやシノンさんも話しているのだが、まさにその通り…こねえは普段だと大人しくて少し地味な印象に映るが、俺の前だといつも元気に振る舞っているのだ。

「そ、そんなことないですよ？相手が弟だろうと誰だろうと関係ありません！」

「でも、今日のシリカちゃんはいつもとより元気に見えるよ。ユイチちゃんとキリトくんもそう思うよね？」

「はい、今日のシリカさんはいつもより明るいです！弟のケイタさんがいるのといないのでは違うのかもしれない。パパはどうですか？」

「俺も気持ちは分かるよ。やっぱり、弟や妹と一緒にだと楽しくなるよな！」

こうやってみんなにも俺達姉弟が仲良しであることが理解されて俺は凄く嬉しい。一方でこねえは恥ずかしさのあまり何も言えない状況ではあるが、内心は満更でもないだろう…

「まあ、これからも仲良くしていこうよ…こねえ！」

「う、うん…」

ミシミシ

俺達が談笑していたその時だった…目の前の地面が割れてそこから人食い花みたいなモンスターが現れた。いよいよ冒険の幕開けと

言ってもいいだろう！

「よし、練習には丁度いい相手だな。リズとシリカはケイタのサポートに、アスナはヒーラーとして後方支援に入ってくれ！」

「ちよつ…残ったあんた達はどうするの？」

「俺達はケイタに後ろからアドバイスする。シノンもまだこつちでのプレイ歴は浅いけど、戦闘スタイルが射撃だからな…それに、これはリズのスキルアップも兼ねているからそれを忘れるなよ？」

「リズさん、頑張ってくださいね！」

「貴方ならきつとできると信じてるわ。」

「あんたら、後で覚えておきなさいよ…」

何があつたかはよく分からないが、リズさんはキリトさん、リーフアさん、シノンの三人を睨みつける。恐らくは本職が鍛冶屋だから戦闘スキルがイマイチなのだろう…ある程度の予測はつく。(完全的な初心者の俺が言える立場ではないが…)

「とにかく、今はモンスターを倒すことに集中しましょう。こねえもOK?」

「私はいつでもいいよ！」

「リズさんとアスナさんもバックアップをよろしくお願いします。」

「はいはい、分かりましたよ…」

「頑張つてね、ケイタクん！」

「は、はい！それでは皆さん、行きましょう!!」

『オー!!』

そして、俺達はモンスターに立ち向かっていく。俺にとっては初めての戦闘ではあるが不安はない…何しろ、いくら野球を辞めてブランクがあろうとも身体能力に関する不安は一切ないからだ。

「まずは俺が切り込みます！うおおお!!」

「ケイタ、待って！」

「ぐえっ!?!」

先陣を切つて俺がモンスターに突っ込んだその時、触手が俺の腹部に命中して10m後方まで飛ばされる。初期スキルだとこんなものだろうか…HPも大幅に減ってしまう。

「ケイタクん、大丈夫？」

「ええ、身体は平気ですけどHPが…」

「心配しないで… f y l l a h e i l l a u s t r (スー・  
フィツラ・ヘイル・アウストル)！」

アスナさんが呪文を唱えると、俺のHPは瞬く間に全回復した。ひとまずは命拾いしたというところか…

「とりあえず、HPは回復させたよ。」

「ありがとうございます。それじゃあ、戻りますね！」

俺は戦列へと復帰してこねえとリズさんのバックアップに入る。今の自分では自ら切り込むのは無理だ…こうなったら後ろに回るしかないようだ。

「リズさん、こねえ！」

「ケイタ！」

「あんたね、初期スキルなのにバカのように突っ込んでどういう考えをしているのよ…」

「すみません。とにかくここは俺がバックアップに回ります…二人は前から攻撃を！」

「分かった、リズさん…」

「ええ、言われなくても！」

こねえとリズさんは先陣を切ってモンスターに攻撃を仕掛ける。計画通りであればこの二人が切り開いた道を俺が突っ込んでとどめを刺すという構図だ。

「はあああああ！」

こねえは剣(ディフェーザ)、リズさんはハンマーのような武器(スミサリイメイス)でモンスターに一発を浴びせる。この合わせ技にはモンスターのHPも大幅に減少！後は俺がとどめを刺すだけ、そう思ったその時…

「うわっ！」

「シリカ!？」

モンスターが突然上から触手を振るい、それがこねえに命中して地面に叩きつけられる。これは大ピンチだ…

「大丈夫?」

「私はなんとか…」

モンスターは容赦なく二人を見下ろせる場所まで迫っていた。このままだと仲良く揃ってやられてしまう…そう思った俺は助けに行こうと自らモンスターへと突っ込んでいく。

「こねえ、危ない!ぐわっ…」

「ケイター!」

俺はこねえの代わりにモンスターの触手の餌食になってしまった。このままだと食べられてゲームオーバーに!ただ、相手も素の力が強いのか自力で触手から脱出ができない…もがいている内に口への距離は迫り、HPもみるみる減っていく。

(こねえ、助けて…)

「私の…私の弟に手を出すなああああ!!」

心の中で助けを祈っていたその時、こねえは大きな声を上げてモンスターに斬りかかる。その姿は今まで弱気なイメージがあった彼女からは想像できないぐらいの怒りで、その勢いのままに剣でモンスターを真つ二つに斬り裂いた。

『す、凄すぎる…』

この様子を見た他のメンバーは揃って驚いていた。みんなもこんなこねえを見たことがなかったのだろうか…とにかく、俺は自分のことをこれぐらいに大事だと思ってくれていることを知り嬉しく感じた。

「こねえ、助かったよ。ありが…」

バシッ

俺がこねえに感謝を伝えようとすると、突然と彼女は右の頬をビンタしてきた…痛みはバーチャル空間故に感じないが、衝撃に関してはリアルに伝わる。

「貴方何やってるの!勝手なことばかりして…」

「えっ?」

「大体いつもそうでしょ!私の言うことは聞かないし、感情に任せて人に迷惑をかけてばかり…しかも、アスナさんやリーファさんに対し

ては鼻の下を伸ばして！だから私はALLOをやらせるのは反対だったんだよ…」

こねえは涙目になりながら、俺への怒りをぶつける。正直な話、彼女からここまで怒られたのはこれが初めてで何も言えないし、何と返せばいいのかが分からない…：それほどのインパクトだ。

「ごめん。でも、俺はこねえを守りたかったから…」

「もう言い訳は聞きたくない…：ケイタなんかもう知らないんだから！！」

そう言うところねえは羽を広げてどこかへと飛び去っていく。俺達の仲は一瞬にして引き裂かれたのだ…：これからどうすればいいのか、それが頭を過り絶望のどん底へと叩き落とされた…

To be continued…

## 引き裂かれる姉弟（後編）

side ケイタ

『もう言い訳は聞きたくない…ケイタなんかもう知らないんだから!!』

俺の胸にこねえから発された言葉が突き刺さる。喧嘩をしたことは数えられないほどあったけど、こんなことを言われたのはこれが初めてだ。

「ケイタ、俺で良ければ相談に乗りたいたんだけど…いいかな？」

その時、キリトさんが俺の元に歩み寄っては落ち込む俺に手を差し伸べてくる。彼もリーファさんという妹がいるだけにこねえの心境とかを理解できるはずだ…乗っけてくれる相談を断るわけにはいいい。

「分かりました…ありがとうございます。」

「お兄ちゃん、私も一緒にいさせて！」

「もちろん、リーファにも協力してもらいたいと思ってたんだ。それじゃあ行こうか…」

「はい。」

「シリカちゃんの方は私に任せて！」

「分かった、シリカの方はアスナに任せるよ。」

こうして、俺はキリトさんとリーファさんに連れられて拠点である鍛冶屋へと戻るのであった。こねえの方はアスナさんが説得してくれるとのことなので、女性同士だから解決も期待できそうかもしれない…

~~~~~

「お兄ちゃん、ケイタクくん…紅茶作ってきたよ。」

「ありがとな。」

「ありがとうございます…」

鍛冶屋に着いて早々、俺は個室に招かれてリーファさんが作った紅茶を配る。それにしても、バーチャル空間とはいえ鼻に伝う紅茶の香りのリアリティーが半端ない…改めて、ここがゲーム内なのかと疑いたくなるぐらいに魅力的な世界観だ。

「さて、まだ整理できてないと思うけど…何があつてこうなつたのかを俺達に教えてくれないか？」

「俺にもよく分かりません…ただ、こねえがピンチに陥っていたところを助けただけですよ。」

「そうか。しかし、シリカはアスナやスグに鼻の下を伸ばしていたとか言つてたけど…」

「スグ？」

「ああ、リーファのことだよ。リアルだと名前は“直葉(すぐは)”だからな…俺は昔からこの子のことをスグと呼んでるんだ。」

なるほど、いきなりアバターネームと脈絡のないあだ名が出てきてビックリしたけどリーファさんのことだったのか…バーチャルでもリアルでも関係なく仲良くできるといふのは素晴らしいことである。

「お兄ちゃん、今はその話関係ないでしょ！」

「そ、そうだな…ごめん。」

「それで、ケイタクくんはその…私やアスナさんに夢中だったということ？」

「えっ、いや!?違うと言つたら嘘になるかもしれないけど、多少は…はい。」

「なるほど。それはシリカちゃんも嫉妬するね…私もその気持ちは十分に分かるよ。」

「分かるって…こねえの気持ちですか？」

「うん、実はね…私、お兄ちゃんのことを好きすぎてアスナさんに嫉妬してしまったことがあるんだ。それで、お兄ちゃんのアスナさんへの想いを知る度に色々と考え込んで…」

そう言われてみればこねえは俺のことを大事に想つてくれていた。

『姉弟だから』という理由で封じ込めてはいるが、俺はいつも優しく可愛いこねえのことが大好きだ…もしかしたら、こねえも俺と同じ感情を持っているのかもしれない。

「そんなことがあったんですね。その気持ちにキリトさんは気づいていたんですか？」

「ああ、薄々とは気づいていたよ。この時の俺達はスグも自己紹介の時に言っていたと思うけど、実の兄妹じゃないことを知ってしまったて気まずかった時期だったんだ。その上、アスナがこのALOに幽閉されていたこともあって俺はアスナのことしか考えられずでスグには苦しい想いをさせてしまった…でも、互いに想いをぶつけ合ったことで今があるんだ。こうやって仲直りできたのは何かの巡り合わせなのかもしれない。」

キリトさんはその当時のことを振り返り、しみじみとその時の出来事を語った。ここまでに至るまで二人は相当な苦労をしたということが同じ姉弟（兄妹）の片割れという立場として痛いほどに伝わってくる。

「そうだね…だから、私とお兄ちゃんのようにケイタクくんも自分の想いを伝えてみたらどうかかな？そうすればきっと仲直りできるよ！」

「大丈夫、シリカは優しいし物分かりもいいからな…君ならできるよ！」

こうして、俺はリーファさんとキリトさんに励まされて一歩踏み出す勇気と仲直りできるだろうという自信が湧いてきた。

「ありがとうございます…俺、仲直りできるように頑張ります！」

「キリトくん、リーファちゃん！」

すると、アスナさんが俺達のいる部屋を訪れる。どうやらこねえの説得も終わったようだ…

「アスナ、シリカの方は？」

「大丈夫、何とか解決したよ。ケイタクくんをリアルで待ってるって…」

「分かりました。お三方、行ってきます！」

「ああ、また機会があったら一緒に冒険しような。」

「何かあったら、私にも頼ってもいいからね！」

「ケイタクんの無事を祈ってるよ。」

「はい！それでは…」

こうして、俺はメニューから『ログアウト』を選びALOの世界を後にして現実世界の自宅へと帰還する。こねえはどんな顔をして俺を待っているのだろうか…仲直りできるといいな。

~~~~~

目が覚めると、俺は自分の部屋に戻っていた。そして、アミュスファイアを外してこねえの部屋へと向かう…

「こねえ、部屋にいる？入るよ…」

ガチャ

「…」

「おかえり、珪太…」

部屋に入ると、そこにはいつものような笑顔で待つこねえの姿があった。喧嘩した時の怒りはどこにもない…それだけでも安心できる。

「こねえ、こねえツ…！」

そして、我慢ができなくなった俺は思わずこねえのもとへと飛び込んで、しがみつくと同時に彼女の身体を抱きしめた。俺の目からも熱いものが流れ、抱きしめる腕の力も強くなる…

「どうしたの、いきなり抱きしめて…苦しいよ？」

「ごめん！俺ってこねえに迷惑をかけてばかりだし、ちっとも役に立ってずで何の役にも立ってないから…だけど、こねえを守りたくて。」

「ううん、私の方こそごめんなさい。珪太が他の人と仲良くしているのを見て嫉妬してキツく当たっちゃった…私ってお姉ちゃん失格だね。でも、珪太が私のことを守ってくれたのは嬉しかった。」

「こねえ…」

「それに…珪太は私が落ち込んでいたら励ましてくれるし、家事もし

てくれるから十分役立つてるんだよ？だから、自分に自信を持って！」

こねえは珍しく俺のことを目の前で褒めてくれた。普段は目の前だとこんな感じで褒めることなんてないので、驚きも多少伴っているがその分嬉しさもある。

「俺の方こそいつも家事をしてくれたり、話を聞いてくれてありがとう！そんなこねえがいたから今の俺がいるんだ。本当に感謝してるよ…」

こうして、俺達は無事に仲直りをする事ができた。一時はどうなるかと不安に思ったが、元通りの仲良しに戻れて本当に安心の一言に尽きる。本当に嬉しいことだ…

~~~~~

コンコン

夜中、俺が寝ていると部屋の外からドアを叩く音が聞こえる。こんな時間に一体誰なんだ！滅多に帰ってこない母さんか父さんか、あるいは…いや、こねえも寝てるからそれもないな。とりあえず、ドアを開けよう…

「はーい…って、こねえ!?!」

すると、目の前には予想外のことにはパジャマ姿で髪を下ろしたこねえがいた。普段は丁寧にノックもせずいきなり入ってくるのだが、あまりにも珍しいことにまず何から触れればいいのか分からない…

「ごめんね、今日のことを思い返すと少し寂しくなっちゃって。その…一緒に寝てもいいかな?」

「えっ、うん…別にいいけど。」

「ありがとう。それじゃあ、お邪魔するね…」

こうして、俺とこねえは添い寝することになった。こうやって一緒

に寝るのは何年ぶりのことだろうか？あまりにも久しぶりすぎて少し緊張してしまう…

「それにしても、こねえと久しぶりに寝るのは久しぶりだよな。」

「うん、珪太は雷が鳴ってた日はいつも『雷怖い』と泣きながら私の部屋に来ては一緒に寝たよね。ハッキリと覚えてるよ♪」

「その話は恥ずかしいからやめてくれ…」

「もう、照れちゃって…珪太は可愛いなあ。」

「からかうなつての！俺だってこねえに甘えたい時だってあるんだよ…姉弟なら当たり前だろ？」

「そうだね、うん…それじゃあ私はもう寝るけど、何か話したいことがある？」

こねえから話したいことは何かと訊かれ、俺は話題を絞り出そうとする。すると一つ大きな質問が頭に浮かんだ。

「そうだな…こねえって俺のことをどう思ってるの？」

「えっ？それはもう答えたと思うけど…珪太は私を励ましてくれたり、家事も手伝ってくれたりして頼りになるって。」

「違うんだ！一人の男としてどう思ってるのかって意味だよ…俺って男としてどんな風に映っているのか知りたいんだ。どんなことでも構わないから、ハッキリと教えてほしい。」

もう我慢するのも限界だ…そのタイミングで俺は自分が男としてどうなのかをこねえに訊ねる。どんな答えでも構わない…嫌われたら嫌われたで男として諦めるまでだ。

「そうだね…珪太は少しいたずら好きなどころもあるけど、普段は凄く優しく、真面目に何事にも真剣に打ち込んでくれる。そんな姿がかっこいいなって私は思ってるよ。」

こねえは笑顔で俺の魅力を語る。少々照れるけど、ここまで認めてくれるなら我慢する必要もない。

「こねえ…俺、こねえのことが！」

「すう…」

俺が自分の気持ちを伝えようとするが、こねえはいつの間にか寝落ちしていた。相当疲れたんだろうか…これは仕方ない。

「こんなタイミングで寝るとはな…でも、こねえは男としての俺を認めてくれた。きつといつの日かは伝わるはず…」おやすみ、こねえ。」

俺は今回のことを前向きに受け止め、寝てるこねえにおやすみと言  
い残し眠りについた。俺の気持ちがいつの日か伝わるといういな…

T o b e c o n t i n u e d …

## 禁断の恋、固まる決意

side 珪太

俺は今、高校の剣道場にて新聞部員として剣道部の様子を取材している。今日は日曜日で普段だったら学校も部活も休みではあるが、この日はウチの学校の剣道部と埼玉屈指の名門である浦和龍昇（うらわりゆうしよう）高校の剣道部が練習試合をやるこのことで急遽新聞部の俺達が駆り出されることとなったのだ：現在は女子の団体戦が行われているところである。

「どうだ、綾野！剣道って華やかなスポーツだと思っただろ？」

「は、はい。そうですね…」

元剣道部の新聞部部长である外崎先輩はこうやって剣道の魅力を勧めてくるが、ALOの豪快な戦いを知る俺としてはあまり惚れる材料はない。しかし、剣を振るい力強く相手に立ち向かうことに関しては共通する何かを感じる…

「勝負あり！」

目の前の試合が終わり、いよいよ次の試合を迎える。次は副将戦：ウチは先ほどの中堅戦で負けて1勝2敗、相手側は2勝1敗と後がない状況である。

「こっちはキャプテンの両角で行きます。両角、行ってこい！」

「はい！」

ウチの方は女子のキャプテンである『メガネの両角』こと両角先輩を送り込む。彼女はチームのムードメーカーであり、実力に関しては2年時のインターハイの個人戦でベスト8の実績を持つなかなかの実力者だ。

「それならば、こちらはエースの桐ヶ谷で行きましょう。桐ヶ谷、お前が決めてこい！いいな？」

「はい！」

そして、相手側は桐ヶ谷という（監督曰くの）エースを送り込む。黒髪ショートボブで本当に剣道をやっているのかと言いたくなるぐらいに童顔なのだが、果たしてエースの器に相応しいのだろうか？外

見からはよく分からない…

「先輩、相手の桐ヶ谷って人はエースと言ってましたけど…そんなに強いんですか？」

「バカ野郎！お前、浦和龍昇の桐ヶ谷直葉を知らないのか!？」

「す、すぐ…は？」

俺は外崎先輩の口から『直葉』という聞き覚えのある名前を耳にする。その人って確か、キリトさんの妹さんでつい昨日会ったばかりだ…なるほど、リアルではこんな感じなのか。(ALOは見た目とかがランダムで決まるので、リアルとゲームの容姿の違いは承知済み)

「ああ、彼女は1年ながらインターハイと玉竜旗のレギュラーに抜擢されて今は2年生ながら3年生を差し置いて名門龍昇のエースに選ばれた逸材なんだぞ？おまけに、ルックスとスタイルの良さから剣道専門雑誌にも特集が組まれた実績もあり、グラビアが近日撮影されるという噂もあるんだぜ！凄いだろ？」

「そ、そうですか…」

直葉さんってそんなに凄い人だったのか…こねえが言うにはALOでは兄であるキリトさんが率いるギルドの中では魔法と剣を扱わせれば超一流とか言ってたぐらいだから、剣道で身につけたスキルがALOに活かされるとするならば相当な強者であることに間違いない。

「始め！」

審判の合図と共に両角先輩と直葉さんがお互いに立ち向かっていく。その姿は遠くで見ても力強い…どちらも実力者だけに驚かされる。

「めえええええええん!!」

「どおおおおおおお!!」

開始15秒で互いの技が両者に命中するが、審判の旗は上がりずどちらも有効打と認められなかった。そんな中で試合は進んでいくものの、互いの技の打ち合いが続きなかなか決定打が生まれ…そんな中で試合開始から1分30秒が経過して試合が動いた。

「こてえええええええ!!」

圧力に押された両角先輩に一瞬の隙が生まれ、プレッシャーをかけた直葉さんの小手が命中して赤い旗が上がる。

「一本、勝負あり！」

そして、団体戦は相手の浦和龍昇高校女子剣道部が大將戦を待たずにして快勝した。本来であれば大將クラスの直葉さんを副將に持ち込まれては為す術がない：ちなみに、ウチの大將は都大会では無敵で全国でもベスト4クラスの大エースである諸熊先輩が控えていたのだが、切り札を使う前に負けてしまうという結果に終わってしまった。

「強いですね…」

「ああ、まさか試合中に隙を見せない両角があんな形で負けるとは予想外だぜ…この調子だと今年の全国大会は桐ヶ谷さんのものだな。」

外崎先輩もこの強さには唖然とする。俺も彼女の戦いを見て、剣道の魅力をフルで感じる事ができた…彼女は予想通りに剣を扱わせたら超一流である。

「先輩、後でいいいで桐ヶ谷さんと呼んでもらっていいですか？俺、彼女に取材したいんで…」

「ああ、分かった…とりあえず、相手の監督さんに頼んでみる。」

こうして、俺は部長の外崎先輩頼みで直葉さんと呼ぶことに成功した。後は俺のところに来てくれるかどうかを待つのみだ…

~~~~~

練習試合が終わり、俺は校門前で直葉さんを待つ。どうして呼び出したのかと言うと、俺の決意を彼女に聞いてもらいたいからである…似た境遇の人間同士だ、きっと理解してくれると思う。

「こんにちは！」

丁度その時、直葉さんがやって来ては俺に挨拶をする。先ほどまでの道着とは打って変わり、制服姿も可愛らしい…このような人が剣道

をやってるのかと疑問に思うぐらいに魅力的だ。

「こんにちは。すみませんね…突然呼び出して、俺はこの学校の新聞部部員の綾野珪太です。貴方が桐ヶ谷直葉さんですね？」

「そうですけど…って、もしかしてケイタクくん!？」

「はい！昨日ぶりですね、リーファさん…いえ、直葉さん。」

こうして俺と直葉さんはリアルでファーストコンタクトを迎えた訳だが、その中で彼女は俺の姿を見て驚いていた。まあ、それも仕方ないかもな…よく知ってるこねえとほぼ瓜二つなのだから。

「本当に珪子ちゃんとそっくりなんだね。」

「まあ、俺達双子ですから…それはそうと少しお話があるんですけど、いいですか?」

「えっ、取材じゃないの?」

「まあ、後で取材したいこともあるのであながち嘘ではありません。それでも俺がメインでやりたいのは昨日の話の続きなので…」

「うん、いいよ。頼っていいと言ったのは私だからね…」

「ありがとうございます!それじゃあ、立ち話もあれなので俺のオススメのお店に移動しましょう。」

~~~~~

移動すること5分、やって来たのは『ダイシー・カフェ』、俺がいつも通う喫茶店だ。ここは元々こねえが薦めてくれたお店で、初めて来店して以降は親友の友亮や外崎先輩と一緒に事ある度に利用している。

「いらっしや…って、直葉!？」

「エギルさん!？」

すると、直葉さんはマスターを見て『エギル』という訳の分からない名前を口にして驚く。しかも、マスターも彼女を知っているようだが…

「すみません、何が何なのかよく分かりませんが…」

「わ、悪い。とにかく、詳しいことは後で話す…いつもの席は空いてるから座って待っていてくれ。」

「は、はい…」

そして、俺達は言われるがままにカウンター席に腰かける。しばらくして戻ってきた後に何が何なのかを訊いたところ、マスターはSAOサバイバーにして直葉さんや俺と同じALOプレイヤーで彼女と同じキリトさんのギルドに所属しているらしい。なるほど、それならお互いに知ってても納得がいくはずだ…

「なるほど、お前も最近になってALOを始めたのか…しかもキリト達と一緒にクエストも回ったらしいが、どうだったんだ？」

「そうですね…まだまだ剣の使い方とかそれ以外のスキルはまだまだ未熟で迷惑はかけてしまいましたけど、最終的にはこねえに負けにくいぐらいの剣士になりたいです。」

「そうかそうか。俺も最近はその店の仕事が忙しくてなかなかログインができてないからな…今度暇だったらお前の腕前を俺に見せてくれ！」

「分かりました、その時までには強くなりますよ！」

マスターは満面の笑みで俺の腕前を楽しみにしているようだが、次にログインできるまでに俺は強くなれるのだろうか？新たな不安が生まれてしまった…

「すみませーん、注文決まりました！」

「はい、少々お待ちを…それじゃあ、後はお二人でゆっくりしてつてくれ。」

俺達が注文したコーヒーを置いてマスターは他のお客さんのところへとダッシュでかけていく。昼間の喫茶店というのは実に忙しいものだということが見ててよく分かる。

「それで、珪子ちゃんとはどうなったの？」

「おかげさまで仲直りすることができました。これはもう直葉さんのおかげですよ…」

「そうかな？でも、私も力になれて良かったよ。」

直葉さんは安心してそつと胸を撫で下ろす。もちろん兄であるキ

リトさんの働きがけも俺を救ってくれたもう一つの要素と言えるが、彼女もお互いの立場になって話を聞いてくれたからこそ今の俺がいるのだ。

「それで、実はですね…もう一つ相談したいことがあるんですよ。」

「それは何かかな？」

「俺、ずっと前からこねえのことがずっと前から好きで好きで仕方ないんです。だから、この気持ちをこねえに伝えたいと思ってて…」

「それってつまり、珪子ちゃんに恋をしてるってこと？」

「はい。俺、たとえ姉弟という壁があつたとしてもこねえのことを諦めたくありません！仲直りできてそれ以前から自分の気持ちが熱く燃えているのだとしたら…俺はその気持ちを伝えたいです。」

俺はこねえに対する熱い想いを直葉さんにぶつける。同じように上の者に恋をした立場なら俺の気持ちも分かってくれるはずだ…

「珪太くんの気持ちは分かるよ。私も経験したからね…だけど、これで失敗したら元の関係に後戻りできない可能性だってあるんだよ？その覚悟は…」

「できてますよ。覚悟ができてなかったら俺は貴方に相談してませんから…」

「そうなんだ。じゃあ、これをあげるね…」

直葉さんはバッグのポケットからチケットを2枚取り出す。そこには『ワンダフルランド1日利用券』と書かれていた…ちなみに、ワンダフルランドはお隣の千葉県にある日本最大の遊園地である。

「ワンダフルランドの1日利用券じゃないですか…どうして？」

「本来だったら今週の週末にお兄ちゃんと一緒に行こうと思ってたけど、その日はお兄ちゃんにバイトが入ってしまったの…折角なら珪子ちゃんと二人で行ってみるのはどうかなと思って。」

「ありがとうございますー！」

彼女がここまで協力してくれた以上、恩を無駄にはできない…俺は彼女が渡したチケットを感謝して受け取る。

「厳しい道になると思うけど、頑張ってるね。」

「はいー！」

こうして、俺がこねえに気持ちを伝える舞台は整った。後は日程の調整のみである…

~~~~~

「えっ、今週の週末？」

夜ご飯を食べてる時のこと、俺はこねえに今週の週末に予定があるかどうかを確認する。

「うん、実は友亮からワンダフルランドの1日利用券を2枚を貰ったんだ。アイツったらラグビーの練習が急遽入ったからデートする予定だった女の子と行けないって言ってたよ…」

そんな中で俺はワンダフルランドのチケットのことを話す。もちろん、直葉さんと会ったことや彼女からチケットを受け取ったことに関しては伏せているが…(チケットに関しては友亮から貰ったことにしている)

「ワンダフルランド!? 行きたいけど、大丈夫かな? 私達って姉弟だし…」

「そんなことは考えなくていいよ。俺達、最近二人でお出かけしてないだろ? それに、俺は久しぶりにこねえと遊びたいんだよ… お願い!」

「そこまで珪太が言うんだったら… いいよ。今週の土曜日でいいよね?」

「うん。ありがとう、こねえ!」

俺がこねえに気持ちを伝える日まであと6日、舞台も日にちも決まって胸は高鳴る一方だ。どんな結末になろうとも俺は運命を受け入れる覚悟はできている… 果たして、どんな答えが俺に返ってくるのだろうか? その楽しみと動揺を抑えて当日を待つのであった。

To be continued…

## 綾野姉弟の答え、無限の未来へ…

side 珪太

今週も土曜日となり、いよいよ運命の日を迎えた。俺がこねえに想いを伝える日である…これで上手く伝わるかどうか、伝わらなかったらこのようなデートは二度とできないだろう。

「こねえ、準備できた？」

「ちよつと待つてて！後は袖を通すだけだから…」

こねえは部屋の中で依然として着替え中だ。身だしなみは既に整えているらしいが、どんな感じなのかは確認できない。（部屋に入ることができないので…）

「お待たせー！どう…かな？」

しばらくして、こねえがようやく部屋から出てくる。赤のミニスカートに白のブラウス、そこにリボンをあしらうといういつもよりもおしゃれなスタイルで髪型はいつものツイントールではなく長い髪を下ろす感じになっていた。雰囲気もいつもより大人びていて思わず見とれてしまう…

「うん、凄く可愛いよ…特に、いつもと違って髪を下ろしてるのが新鮮でいいね。」

「ありがとう！たまにはこういうのもいいかなって思ったんだ。そう言う珪太もかっこいいよ♪」

「そう？照れるな…」

こねえから褒められて思わず照れてしまう。俺のは黄色のパーカーにジーパンとこねえとは違いシンプルで目に入った服を着ただけなのだが、それで褒められるのは嬉しい反面少し恥ずかしい。

「とにかく、早く行かないと電車に遅れるよ…色々と回りたいからね。」

「そうだね！久しぶりのお出かけだから楽しもう♪」

俺は照れ隠しとして出発を促した。これにはこねえも乗り気だったのですんなりと聞き入れてくれたのはラッキーと言えよう…まあ、色々と園内を回りたいというのはあながち間違いではないが。

~~~~~

『ようこそ、ワンダフルランドへ!』

東京駅から電車で移動すること15分、目的地であるワンダフルランドへとたどり着く。二人で来たのはこれが初めてだが、小さい時に俺達は家族で行ったことがある…その時のことはあまり鮮明に覚えていないが、家族みんなで写真を撮ったり、パレードを見たりしたことは僅かながら覚えている。

「お二人ですね…どうぞお楽しみくださいませ。」

チケットを受付の係の人にを見せて、俺達は園内へと足を踏み入れる。そこには辺り一面に人が沢山いて、アトラクションもバラエティー豊富である。この光景は最後に来た時からほとんど変わっておらず(アトラクション自体は変わってるのもあるけど…)、どこか懐かしさを感じた。

「久しぶりのワンダフルランドだね…俺達って最後に行ったのはいつ以来かこねえは覚えてる?」

「覚えてるよ。確か、5歳ぐらいだったかな?あの時の珪太はジェットコースターに乗りたいたって泣いてたね…それで、アイスクリームをお母さんが買ってくれたら泣き止んで、本当に可愛かったな。」

「それは頼むから忘れてくれ…」

こねえは最後に来た時の思い出を語るのだが、全くロクでもない思い出だ…言われてから思い出し、恥ずかしい想いをする破目に。

「まあ、それよりもジェットコースターに乗ろうよ。遊園地に来たらまずはこれでしょ!」

「そうだね。珪太の行きたい場所だったらどこでもいいよ♪」

恥ずかしさを誤魔化そうとして俺はジェットコースターのある場所へとこねえを連れていく。

(なんて誤魔化せたのはいいけど、俺…ジェットコースターに乗るの

はなんだかんだで初めてなんだよな。」

こねえはS A Oサイバーの仲間同士で遊園地に行ったことがあるので、ジェットコースターの経験があるものの俺に至ってはあれ以来遊園地に行ったことがないのだ…いくらジェットコースターに乗りたいと生意気言ってた時期があつたとしても怖いものは怖い。

~~~~~

「ああ、楽しかった〜！ねっ、珪太？」

「はっ、はははっ…」

俺達はそれからジェットコースターに乗った訳だが、俺に至っては恐怖しか感じなかった。空に近い高いところまで上がっては地上に叩きつけられるかのような勢いで真つ逆さまに落ちるあの感覚はトラウマと言えようか…理想と現実が違うというのはまさにこのことだ。

「ねえ、次はお化け屋敷行こうよ！私、リニューアルしたお化け屋敷に行ってみたいと思つてたんだ。」

「ま、待って！俺は…」

「まさか、お化けが怖いのか？珪太は本当に変わってないね。あの時もお化けを見て泣いていたし、もしかしたら今も…」

「そんな訳ないだろ！俺はもうお化けなんて怖くないさ…あんな作り物、どこからでもかかつてきやがれつてたんだい!!」

なんて強がるのだが、本当はお化けがめっちゃくちゃ怖い。こねえも昔はお化けとかそういう類いは苦手だったのだが、S A Oから戻ってきて以降は全然平気へっちゃら状態である。あつちでホラー以上の恐怖体験をしたのだろうか？

「それじゃあ、行こうよ」

「はっ…」

こうして、俺達はリニューアルして話題沸騰中のお化け屋敷にダイ

ブするのだが…

『うらめしやく!』

「ギャアアアア!」

『私ですか?』

「ヒエエエエエ!!」

言うまでもなく、俺だけが悲鳴を上げるといふ結末でお化け屋敷探検は終幕を迎える。こねえの方は楽しそうにしてたし、むしろ悲鳴を上げる俺を見て笑っていたのだ…かつこいいところを見せるどころか最悪な醜態を晒してしまう。

(今日はこねえに告白する為にかつこよく決めようとしてるのに、どうしてこんな目に遭ってばかりなんだ…)

「ん、楽しかった! 珪太ったら、叫んでばかりでもう面白かったよ… やっぱ、昔と全然変わんないね!」

「ま、まあ…それよりもお腹空かない? そろそろお昼ごはんにしようか。」

「そうだね。もうすぐ12時だし、ひとまずお昼ごはんにしよう! まだまだパレードまで時間がある訳だし…」

やっと俺の恐怖体験は一段落し、午後からのパレードに向けて平穏な時間が訪れるようだ。

「そこのお嬢さん…」

すると、聞き覚えのある低い声が耳に入る。あんまり名前を出したくはないが言うまでもなくアイツだ…

「友亮、お前何してるんだ?」

「げっ!? 何でチビ太もいるんだよ…」

そう、俺の一応の友達の友亮である。どうしてここにいるのか本当に謎としか言いようがない…

「だから、チビ太と呼ぶなって言っただろ…それと、インターハイ予選前の練習はどうした?」

「ああ、それがな…キャプテンがなんとなく休みたいつて言うから休みになっちゃったんだよ。それで、ちようど暇だったからワンダフルランドでナンパって訳さ…」

本当に友亮の所属するラグビー部は大丈夫なのだろうか？今はインターハイ予選前の時期だけに練習をしないといけないはず…なのに、なんとなくで休んでいるようでは強くなれる訳がない。元アスリート立場としてラグビー部に喝を入れたいぐらいだ…

「君が友亮くんかな？」

「ええ、そうっすけど…」

「はじめまして…私は綾野珪子、いつも弟がお世話になってます。」

「こちらこそお世話になってますよ…それにしても、珪子さんとうちで会うのは初めてっすよね？」

「そうだね。それよりも、今日はデートだったと珪太から聞いてるけど…」

「ヤバイ、このままだと俺が直葉さんからペアチケットを貰ったことがバレてしまう！そうなるのとあの時のように最悪な事態に…そう考えると心臓がドキドキするばかりだ。」

「俺がデート？まあ、あながち間違いじゃないっすよ…相手をこれから探してラブラブデートするつもりです。だから、珪子さん…こんなアホはほつといて俺とデートしませんか？」

「どうやら嘘だということはバレていないものの友亮は開き直って人の姉を（弟の俺を目の前にして）堂々とデートに誘おうとする。」

「ごめんね。今は珪太と一緒に遊んでるから…でも、気持ちは凄く嬉しいよ。ありがとう！」

「えっ…？」

「それじゃあ、お昼食へに行こうか！友亮くん、またね♪」

「は、はい…」

「そんなこんなでひとまずこの場は逃れることができた。しかし、本当に俺の嘘はバレていないのだろうか？そこが不安で仕方ない…」

「ねえ、珪太…ちよつと話したいことがあるけど。いいかな？」

「えっ、うん…」

「俺は必死にバレるなと祈っていたが、その祈りはむなしくもバレてしまった。こねえの顔は笑顔でも目は笑っておらず万事休すだ…」

「なるほど、剣道の練習試合で来ていた直葉さんに出会ってお兄さん

である和人さんと一緒に行く予定だったワンダフルランドのペアチケットを譲ってもらったということなんだね…」

「間違いありません。(…っていうか、キリトさんの本名って和人っていうんだな。)」

俺はこねえに事実関係を話せる範囲のみ話した。流石にこねえに告白したいという目的で相談したということは言えないけど、これで多少は許してくれるだろう。

「まったく、素直にそう言えばいいのに…罰として今回のお昼ごはんと買い物は珪太の奢りだね！今回はそれで許してあげる。」

「ありがとうございます…」

こうして、俺は昼ごはんを奢らされては買い物にも振り回される羽目に…財布へのダメージは大きかったが、それでもこねえが喜んでくれて俺も嬉しい。その後にマスコット達によるパレードも行われ、俺達は1日楽しい時間を過ごすことができたのだ。

~~~~~

空は日が暮れて、アトラクションを満喫した俺達はワンダフルランドを後にする。トラブルも途中にあったかもしれないが、なかなか充実したひとときを過ごせたのではなからうか？

「今日は楽しかったね！珪太も楽しかった？」

「うん、久しぶりにこねえと二人でお出かけできて俺も楽しかった。またどこかで遊べたらいいね…」

「そうだね。」

今日の出来事を振り返る俺達…しかし、こうもしていられない。今の熱が冷めないうちでないと俺の気持ちは伝わらないだろう。そして、俺は禁断の一步へと踏み込んだ…

「あのさ、こねえ！」

「どうしたの、早くしないと電車が来ちゃうよ？」

「俺、ずっとこねえに伝えたかったことがあるんだ。今しか言えないことだから…聞き逃さないで。」

「う、うん…」

もう覚悟は決めたんだ。迷わなくてもいい、これが俺の出した答えなのだから。そう思い俺は口を開く…

「俺、ずっと前からこねえのことが好きだったんだ！お姉ちゃんとしても、一人の女の子としても…この気持ちは俺を何度も助けてくれた小さい頃から変わっていない。だから…」

「もういいよ。珪太の言いたいことは分かるから…ありがとう、これ以上は言わないで。」

俺が先を言おうとしたその時、こねえが抱きついてきて『もういいよ』と言わせないかのように遮る。

「私もね、珪太のことが好きだったんだ。弟としてだけじゃなくて男の子としても…だけど、私達は姉弟だからそういう関係にはなれない。そのつもりで今まで我慢してきたのに…これじゃあ我慢できないよー！」

そのこねえの目には涙が浮かんでいた。そして、声を荒げては自分の本音をぶちまけるのである…どうやらこねえも俺と同じ気持ちだったようだ。

「いいんだよ。たとえ姉弟で結婚できなくても、俺達はずっと一緒だから…だけど、お互いに結婚して離れるまでは『恋人』として一緒にいてほしいんだ。それが、俺がこれまでの中で生み出した答えさ…」

「珪太…でも、姉弟で付き合ってるのを知られたらみんなからいじめられるんだよ？その覚悟はできてるの？」

「大丈夫、たとえ俺は周りからいじめられようがこねえを愛することに変わりはないから。どんな運命になろうとも一緒にいたいと俺は決めたんだ…それが姉弟だろうが誰だろうが俺はその姿勢を変えるつもりはないよ。」

「珪太…私もそんな珪太が大好き！だから、これからもずっと私のそばにいてね？」

「ああ、約束する…」

そして、俺はこねえとその場で口づけを交わすのであった。いたずら半分で頬にキスしたことは何度かあるけど、こうやって唇同士で触れるのはこれが初めてだ。涙の味がして少ししょっぱかったのだが、この口づけには安心感、約束。あらゆる感情がこもっていて特別なファーストキスとなった。

~~~~~

それから数日経ったある日のこと。あの後から俺達は周りには内緒ながら正式に付き合うようになった訳だが、このような関係になつてから毎晩添い寝するようになったこと以外は何も変わらぬ日常を過ごしていた。

「おはよう、珪太…」

「おはよう、こねえ。ぐっすり眠れた？」

「そうだね。ちよつと珪太の寝相が悪かったから少し寝不足だったかも。私のことを抱きしめるのならいいけど、顔まで近づけるから緊張しちゃうよ…」

「まだ慣れないのか。俺達、何度もキスしてるのに？」

「何度もって。それは珪太から勝手にしてくるからでしょ!？」

「まあまあ、それよりも朝ごはんが出来上がったよ。今日はスクランブルエッグとソーセージ、ご飯は自分のお好みで注いでくれ！」

「ありがとう!珪太のいつも作る朝ごはんはとっても美味しいよ♪」

「こねえのだって負けてないよ。つと食べるその前に、えい！」

「ちよつ。珪太!？」

俺は部屋のソファァーにこねえを押し倒しては今すぐでもキスができるように覆い被さる。

「まずはこねえのことをいただけかな?俺も朝のぐちそうを我慢されちゃたまらないからね…」

「う、うん。でも、その前をお願いしたいことがあるの。」

「お願い？」

「その、二人の時だけは『珪子』って呼んで…私、珪太とこういう関係になったからには名前と呼ばれたいの。だから…」

「分かったよ、珪子。大好きだ…」

「私も…」

そして、俺達が熱い口づけを交わそうとしたその時だった…

「ただいま。久しぶりに当直続きが終わったわ…って、嘘!？」

「全く、ママと途中で出会うとかおいはどげん運が良かどね…って、何しよるん?…」

「えっ!？」

なんと、運が悪いことに母さんの典子（のりこ）と親父である珪輔（けいすけ）が何の前振りもなく自宅に帰ってきたのだ。それも、これからこねえ…珪子とキスしようというタイミングとちう最悪なタイミングである。

「あんた達、姉弟でしていいこととしちゃダメなことがあるでしょ?…」

「ううん、大丈夫…何でもないよ!…」

「そうそう!俺は単にこねえの熱を測ろうとしておでこを差し出しただけであって…」

「だったら、体温計で測ればいいじゃない…そんな嘘をつく必要はないわよ?…」

「このバカチン共があああああ!!」

「ヒエエエエエ!？」

こうして、俺達はこっぴどく両親から怒られるのであった…お互いに好きだという気持ちを伝えて無事に結ばれたまではいいのだが、この調子だと先がどうなるのか不安が山積みである。そんな俺達はこれから幸せな生活を過ごせたかどうか…それはまた別のお話。

Complete the story.